

歴史と歴史の生成、個人史と集団史の置き換え — 村上春樹長編エッセイ『猫を棄てる——父親について語るとき』について

History and Making of History, Replacement of Personal History and Collective History--Haruki Murakami's Long Essay *Abandoning the Cat: When I Talk About My Father*

楊 炳菁
Yang Bingjing

要旨

村上春樹の長編エッセイ『猫を棄てる』は大きな注目を集めたが、その理由は初めて自分の父親について語ったことと、父親の軍歴が詳細に記述されたからである。一方、先行研究を考察すれば、『猫を棄てる』をめぐる解説は、概ね「主体性」と「歴史」に分けられるが、エッセイの末尾に出た個人史と集団史の関係が看過できない。村上春樹は父親の生涯を詳細に描いただけでなく、親子関係にも触れ、エッセイの冒頭と末尾に2匹の猫も登場させた。村上春樹の父親の軍歴、村上の父子関係、さらに2匹の猫の象徴性と役割を考察すれば、『猫を棄てる』の主題は、歴史と歴史の生成、そして個人史と集団史の置き換えの仕組みだと言える。

キーワード: 村上春樹、猫棄て、歴史、継承、置き換え

1 はじめに

村上春樹の『猫を棄てる——父親について語るとき』（以下、『猫を棄てる』と略す）は、わずか2万字のエッセイでありながら、多くの人々から注目を集めた。このエッセイは2019年6月号の『文藝春秋』に掲載されており、翌年単行本として刊行された。雑誌版と比べて、単行本版は内容的にさほど変わらないが、サブタイトルの一部と個々の小見出しが削除され、「小さな歴史のかけら」というあとがきがつけ加えられた。

『猫を棄てる』をめぐる先行研究を見てみると、数多くの研究者はエッセイの主題に焦点を当てたが、その結論はおおむね「主体性」と「歴史」の二ポイントに集約できる。「主体性」の代表論者は田中実氏で、彼は語りの角度から、「村上が表現したいのは、主体が「集会的な何かに置き換えられ消えていく」ことを前提に、主体を相対化する認識論の再検討である」⁽¹⁾と論じた。一方、『猫を棄てる』は「歴史」を表現すると見ている人が多く、その主張を細分化すれば、三つのレベルに分けられる。まず、『猫を棄てる』は個人的なエッセイだという見方で、代表例は『中華読書報』に掲載された康慨氏の文章である。康氏は、「猫棄ての話を通して、父親が隠した戦時中の体験と複雑な親子関係を回想した」⁽²⁾とまとめたが、「戦時中の体験」や「複雑な親子関係」という表現から、エッセイを個人的な文章だと見ていて、「歴史」との関わりで言えば村上家の「家族史」だと考えていることがわかる。次に村上春樹の戦争観を表現したという見方で、代表は黄国山氏の文章「村上春樹『猫を棄てる』における戦争観」⁽³⁾である。タイトルだけを見ても氏の主張がわかり、また「戦争観」

という結論は明らかに個人や家族の範囲から逸脱したと言えよう。一方、「戦争観」という結論は『猫を棄てる』が特定の時期、あるいは特定の分野の歴史を扱っているという考えを反映しているが、いわゆる特定の時代とは日中戦争、特定の分野とは戦争の歴史それぞれを指しているのである。三番目の見方は、村上春樹の歴史観を表現したという考えで、代表例は谷立立氏の「ある長い“和解”」という文章である。谷氏からすれば、このエッセイは、「一見したところ、猫を表現したが、実は村上春樹の父親を書いた」⁽⁴⁾。つまり小説家である村上春樹は「息子という立場で父親の人生を記録し、和解にたどりついた道筋」⁽⁵⁾を表現したのである。そして、『猫を棄てる』においては歴史も書かれており、「人生という長い道のりに残された「歴史の小さな断片」として、村上春樹の歴史観を反映した」⁽⁶⁾と指摘したのである。「歴史観」とは、歴史の構造や変遷についての全体的なとらえ方である。「全体的」であるがゆえに、特定の時期や分野などは一線を画して、歴史そのものが村上春樹の思考対象だったということを意味しているだろう。

『猫を棄てる』をめぐる研究は多岐にわたっているが、その原因はおそらく以下の通りである。前述のように、単行本として出版された『猫を棄てる』はその最後に「小さな歴史のかげら」と題されたあとがきが収録されているが、あとがきのタイトルからすれば、エッセイは明らかに歴史を表現するものである。一方、田中実氏は雑誌版を研究対象にしたが、雑誌版の結びに次のような一節がある。

言い換えれば我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の、名もなき一滴に過ぎない。固有ではあるけれど、交換可能な一滴だ。しかしその一滴の雨水には、一滴の雨水なりの思いがある。一滴の雨水の歴史があり、それを受け継いでいくという一滴の雨水の責務がある。われわれはそれを忘れてはならないだろう。たとえそれがどこかにあっさり吸い込まれ、個体としての輪郭を失い、集合的な何かに置き換えられて消えていくのだとしても。いや、むしろこう言うべきなのだろう。それが集合的な何かに置き換えられていくからこそ、と⁽⁷⁾。

これはきわめて重要な一節で、村上春樹が最も表したいこととも言えよう。しかし、引用した部分を考察すればわかるように、これは歴史に対する村上春樹の考えではなく、個人史と集団史の関係をめぐる見解なのである。つまり、個人史は唯一無二のものであるが、結局集団史に取って代わられるのがこの一節の趣旨である。実際には、あとがきがなくても、『猫を棄てる』が歴史を表現しているの是一目瞭然であるが、田中実氏が「主体性」を主張したのは、おそらくこの一節における個人史と集団史の関係に見られたパラドックスであろう。言い換えれば、個人史が唯一無二のものである以上、集団史に置き換えられる可能性はないということである。

一方「歴史」と主張する論者のうちさらに3つのレベルに分けられるのは、エッセイの内容と大きく関わっている。『猫を棄てる』はまず村上春樹の父親、村上千秋の生涯を回想し、次に彼の3回にわたる軍隊入隊経験を詳細に記述する。そして最後に、上記引用したように個人史と集団史を結びつけて終止符を打った。このように、個人史あるいは家族史、戦争観、歴史観という3つのレベルはそれぞれエッセイの三つの内容と対応していると言えよう。しかし、上記引用が示したように、たとえ「歴史」というポイントが3つのレベルに分けられても、「歴史」が表現されたと認める限り、村上春樹が表現しようとすることから外れているのではないだろうか。なぜなら、村上春樹がこのエッセイで「いちばん語りたかったのは」(第94頁)個人史と集団史の関係なのであるからだ。こういう意味からすれば、田中実氏の『猫を棄てる』論は「歴史」というポイントから完全に離れたように見えるが、個人史(家族史)、戦争観、歴史観などの見解と比べて、その議論こそ、個人史と集団史の関係をめぐって展開されたものと言えよう。ただ残念なのは、氏が村上春樹の個人史と集団史の置き換え方法を理解できず、結局主体性に焦点を当てて、個人史と集団史のパラドックスを指摘したことである。したがって、もし個人史と集団史の置き換え関係に焦点を絞れば、村上春樹はいかに唯一無二の個人史を集団史に置き換えたかが『猫を

棄てる』を論ずるときのキーポイントになるだろう。

この問題を解決するには、エッセイに登場した2匹の猫に注目する必要があると思われる。エッセイのメインタイトルに猫が出てくるだけでなく、村上春樹は繰り返して猫の重要性も強調したからである。例えば、彼は単行本のあとがきにおいてこう書いている。

亡くなった父親のことはいつか、まとまったかたちで文章にしなくてはならないと、前々から思っていたのだが、なかなか取りかかれないうまま歳月が過ぎていった。身内のことを書くというのは（少なくとも僕にとっては）けっこう気が重いことだったし、どんなところからどんな風書き始めれば良いのか、それがうまくつかめなかったからだ。（中略）でも子供時代、父と一緒に海岸に猫を棄てて行ったときのことをふと思い出して、そこから書き出したら、文章は思いのほかすらすらと自然に出てきた。（第98・99頁）

そして、川上未映子と対談したときにも次のように言った。

村上：猫のことを入れなければ、この文章は書けなかったと思う。いちばん最初の猫を棄ててに行く所から話がスッと出てくる。それがないと出てこないんだよね、スッと。

川上：この猫が逆ではダメだったわけで。

村上：もちろん逆じゃダメ。⁽⁸⁾

エッセイにおける猫が多大な役割を果たしたことは以上の引用から推測できるが、先行研究においては猫に触れる論考は少ない。したがって本稿は、2匹の猫の象徴性と役割を探り、『猫を棄てる』の主題及び個人史と集団史の置き換えについて究明する。

2 継承と歴史

『猫を棄てる』においては、個人史と集団史の関係が表現される前に、村上春樹はまず自分の家族史を例に、歴史とは何か、歴史の生成はいかなるものなのかについて自分の考えを表明した。

2.1 歴史と歴史の生成

歴史と歴史の生成に対する村上春樹の理解は、彼の父親の軍歴調査の時における姿勢の変化に反映されていると思われる。前述したよう、村上春樹は『猫を棄てる』で、父親の人生、とりわけ彼が軍隊に入隊した3回の体験を詳細に記述している。だが、村上春樹は実際には長い間、父親のその体験についての調査に抵抗していたのである。

とにかくそのように、父が第二十連隊に所属していたと思い込んでいたせいで、僕は父の軍歴について詳しく調べるまでに、というか調べようと決心するまでに、けっこう長い期間がかかった。父親の死後五年ばかり、そうしなくてはと思いつながら、なかなか調査に着手することができなかった。（第39頁）

父の軍歴を調べるのをためらったのは、父が第二十連隊の一員だったと思い込んだからで、第二十連隊と言えば「南京陥落のときに一番乗りをしたことで名を上げた部隊だった」（第39頁）。つまり、村上春樹は「ひょっとしたら父親がこの部隊の一員として、南京攻略戦に参加したのではないかという疑念」（第39頁）を抱いたため、

「彼の従軍記録を具体的に調べようという気持ちにはなかなかできなかった」（第39-40頁）というわけである。そしてそれだけでなく、「生前の父に直接、戦争中の話を詳しく訊こうという気持ちにもなれなかった」（第40頁）。父親の軍歴調査への抵抗は、一見したところ村上春樹の反戦の意思のように思える。というのは、第二十連隊は「お公家さん部隊」（第39頁）と揶揄されながらも、その「行動にはとにかく血なまぐさい評判がついて」（第39頁）いたからである。そして、父親の入営は1938年で、「すれすれ一年違いで南京戦には参加しなかった」（第40頁）ことを知った時、村上春樹は、「ふっと気がゆるんだというか、ひとつ重しが取れたよう感覚があった」（第40頁）ようである。しかし、村上春樹が父の軍歴調査を拒む気持ちは本当に反戦のためだったのだろうか。

父親の軍歴調査に抵抗感を覚えたのは、自分の父親であるからという特殊性によるものではなく、調べなければならぬ、言い換えればトラウマとしての過去に直面せねばならないと知りながら、それを直視したくないからと言えよう。したがって、父親の軍歴を真剣に調査を始めたのは、心から過去と向き合いたくなり、心の傷をもたらすものに直面する行動と言っていいだろう。ここで「心の傷」あるいは「トラウマ」という表現が使われたが、それは、幼い頃、村上春樹が父親から聞いた「軍刀で人の首がはねられる残忍な光景」（第52頁）のことを指しており、それは「ひとつの疑似体験」（第52頁）として村上春樹の「心に強烈に焼きつけられ」（第52頁）たものであった。一方、父の軍歴調査への抵抗から真剣に調査に取り組むという変化が生じたのは、つぎの認識を得たからだろう。

父の心に長いあいだ重くのしかかってきたものを——現代の用語を借りればトラウマを——息子である僕が部分的に継承したということになるだろう。人の心の繋がりというのはそういうものだし、また歴史というのもそういうものなのだ。その本質は〈引き継ぎ〉という行為、あるいは儀式の中にある。その内容がどのように不快な、目を背けたくなるようなことであれ、人はそれを自らの一部として引き受けなくてはならない。もしそうでなければ、歴史というものの意味がどこにあるだろう？（第52-53頁）

この一節は、村上春樹が幼い頃、父親から中国人捕虜の処刑の話聞かされた後に出たもので、村上春樹が考えた歴史及び歴史の生成をめぐる考えと言っていいだろう。村上春樹にすれば、歴史は決して単なる過去に起きたことだけではない。たとえ過去の出来事であっても、継承されなければ歴史にはならないのである。一方、継承とは親の世代が経験したことが次の世代の体に残された「疑似経験」で、この「疑似経験」が次の世代の体の一部になった時点で継承が成立するわけである。そして、継承は、必然的に人間の意識を伴うもので、上記引用における表現で言うと「心の繋がり」なのであろう。これを言い換えれば、人間の意識を伴わない過去は、たとえ歴史と呼ばれても意味がなく、これが「その本質」に含まれた真意であろう。

ここで村上春樹は、歴史に対して彼なりの理解を表明すると同時に、歴史がいかに生成されたか、すなわち歴史の生成メカニズムについても重要な説明を行った。村上春樹にとって、歴史は自明な概念ではない。なぜなら、その自明性の背後に、必然的に主体としての人間が不在だからである。また、歴史は自明な概念ではないことに関連して、歴史も単なる人間社会の変遷における出来事の記録だけではない。確かに記録は人間の主体性が反映されるが、出来事の未経験者にとっては、過去の知識に過ぎない。『猫を棄てる』のあとがきに「歴史は過去のものではない」（第99頁）という一句があるが、歴史は過去の出来事の記録ではないという意味を指しているだろう。

歴史とは何かをめぐる説明においては、最も注意すべきなのは、村上春樹による歴史という概念の崩壊と再構築である。つまり、村上春樹はまず「歴史」を一般的な歴史に対する理解と分離させ、次に自明でもなければ、過去の記録でもない歴史とは一体何なのかについて彼なりの解釈を与えたのである。この新たな解釈は継承でまとめられ、言い換えれば歴史は〈引き継ぎ〉によってはじめて生まれたものである。また、歴史の生成について

は、前文で触れた「疑似経験」がポイントで、「疑似体験」が次の世代の体の一部になる時に歴史が生成され、その過程が生成のプロセスなのである。これを「あとがき」における表現で言えば「それは意識の内側で、あるいはまた無意識の内側で、温もりを持つ生きた血となって流れ、次の世代へと否応なく持ち運ばれていくものなのだ」（第99頁）ということである。このように村上春樹は、歴史のシニフィアンとシニフィエの分断と新たな繋がりをを行い、歴史に彼なりの意味を付与した。そしてその意味を生み出す過程が、歴史の生成なのであろう。

村上春樹の父親は、「戦場での体験についてほとんど語ることがなかった」（第53頁）が、中国人捕虜の処刑のことを幼い村上春樹に語った。村上春樹は、「このことだけは、たとえ双方の心の傷となって残ったとしても、何らかの形で、血を分けた息子である僕に言い残し、伝えておかななくてはならないと」（第53頁）推測しているが、父親の語りは間違いなく一種の継承と言えよう。この「疑似体験」としての継承が、幼い村上春樹にトラウマを植え付け、父の軍歴調査に抵抗するわけである。だが、いくら抵抗しても、歴史は依然として自らの意義を明らかにさせる。したがって、父親の軍歴調査に対する抵抗からの変化は歴史に対する村上春樹の理解を反映し、歴史の生成メカニズムも表現したのだろう。

2.2 父親村上千秋の継承

父の軍歴調査に対する姿勢の変化から、村上春樹が理解した歴史と、その生成が読み取れる。こういう意味で言えば、『猫を棄てる』は決して村上春樹の父親の体験の客観的な記録というわけではなく、むしろ親世代の体験がいかに引き継がれていくかが主な内容なのである。実際にはこのエッセイは確かにそれを表現したが、本節ではまず父親である村上千秋の継承を見てみよう。

『猫を棄てる』における村上春樹の父親をめぐる描写を考察すれば、毎朝の「おつとめ」と俳句への情熱がその人生を貫いていたとわかる。毎朝の「おつとめ」とは、「毎朝、朝食をとる前に、彼が仏壇に向かって長い時間、目を閉じて熱心にお経を唱えていたこと」（第15頁）であるが、そこに「厳しい雰囲気は漂っていた」（第16頁）ため、「日々の習慣」というような簡単な言葉では片づけられない、普通ではない」（第16頁）ものがあつた。かつて幼い村上が誰のためにお経を唱えているのか父に尋ねたが、「前の戦争で死んでいった人々のためだと。そこで亡くなった仲間の兵隊や、当時は敵であった中国の人たちのためだと」（第16頁）父親は答えた。

父親の毎朝の「おつとめ」について、村上春樹は「壁と卵」というエルサレム賞受賞のスピーチで言及したことがあるが、『猫を棄てる』での再登場は、父親にとって特別な意味を持つことを示している。この特別な意味は、父親がお経を唱える時に向かった小さなガラス・ケースと、「一日たりともその「おつとめ」を怠らなかつた」（第16頁）というところに具体的に反映されていると思われる。「一日たりともその「おつとめ」を怠らなかつた」という表現は、時間と態度の二側面から「おつとめ」を父親がいかに重視していたかを表している。そして、お経を唱える時に普通の仏壇ではなく、菩薩像が入った円筒形の小さなガラス・ケースであるのは、父親の「おつとめ」は単純な宗教的儀式ではなく、個人的な色合いが強く、自分の意志を表す独特な行為だと言えよう。

毎朝の「おつとめ」をめぐる描写は、これは父親にとって特別な意義があることを強調すると同時に、父親が引き継いだ家族の伝統も反映していると思われる。『猫を棄てる』を読めばわかるように、村上春樹の祖父、村上弁識は京都の安養寺の住職である。六人の息子をもうけた彼は子供たちの全員に仏教に関する教育を受けさせたため、「六人の子供たちのおおかたが、多少なりとも僧侶としての資格をもっていた」（第23頁）。村上春樹の父は、仏教の教育機関である西山専門学校に通っただけでなく、「少僧都」の資格も取得した。そして、「夏のお盆の時期になると、兄弟がみんな京都に集まって泊まり込み、手分けして檀家回りをするのが習慣になっていた」（第23頁）のである。以上のような村上家の状況からわかるように、父親の千秋が毎日行っていた「おつとめ」は、個人的な色合いを帯びた特別な行為にもかかわらず、お経を唱えるような家族の伝統を前提にして行っていたのである。言い換えれば、父の意志は、家族の伝統とも言えるお経を唱えることを通じて表現され

たわけである。したがって、祖父が死んだ後、たとえ家族の事情でお寺を継がなかったとしても、「自然な信仰心のようなもの」(第28頁)といい、毎朝の「おつとめ」といい、父親の体に家族の伝統が深く刻まれていたと言えよう。

父親の毎朝の「おつとめ」が家族の伝統を示しているとすれば、彼の俳句への情熱は日本文化の伝統を受け継いだものだと言えよう。『猫を棄てる』においては、父親がいかに俳句を愛し、いかに俳句を作るかという内容が、底流のように貫いている。父親の俳句への関心は、西山専門学校に入学したときから始まり、「当時から多くの句を残している。今風にいえば俳句に「はまった」よう」(第43頁)である。手続きの原因で、父親は西山専門学校での勉強を中断せざるを得なかったが、戦場で俳句を詠んで学校に送り、復学後も「やはり熱心に俳句を詠み続けていたようだ」(第54頁)。西山専門学校を卒業後、父親は「京都帝国大学文学科に入学し」(第69頁)、「京都大学の学生であった時代にも、父はやはり俳句に打ち込んで」(第75頁)いた。村上春樹が生まれた後、すでに京都大学文学部の大学院に進学していた父親は、「生活費を得るために、西宮市にある甲陽学院という学校の国語教師の職に就いた」(第76頁)が、教師になっても「俳句に対する情熱を持ち続けていた」(第83頁)。

周知のように、俳句は季節を表現する季語を含んだ五・七・五の十七音からなる日本独特の定型詩である。「日本独特」であるがゆえに、俳句は文学の一ジャンルであると同時に、日本文化の伝統も代表するものである。村上春樹の父親が俳句に興味を持つようになったのは、家庭教育ではなく、学校教育によるものである。これは、日本文化の伝統が社会化され、広く人々に影響を与えることを意味していると思われる。そして村上春樹の父親はまさにこのような影響を受けた一人であるが、興味深いことに、彼の俳句への情熱を考察すれば、俳句は彼にとって単なる趣味などのような単純なものではなく、家族の伝統のような、宗教的な側面も帯びていたようである。なぜかという、父親の机の上にはいつも季語集が置かれており、「父にとっての季語集は、キリスト教徒にとっての聖書のような大事な存在だった」(第83頁)からである。そして、戦場で俳句を詠むのは、父親にとっての精神的な慰めのようなものだったのである。要するに、俳句は村上春樹の父にとって宗教的な慰めを与えるもので、エッセイにおける言葉で言えば、「唯一の、大切な逃げ場所」(第45頁)だったのである。

村上春樹の父にとっての俳句は宗教性を帯びたもので、日本文化の伝統が継承された印でもある。一方、この継承は、最初の学校教育の後、師匠と弟子の形で表されている。『猫を棄てる』によれば、父親に俳句を教えたのは鈴鹿野風呂で、彼は「高濱虚子に学んだ」(第65-66頁)ことがある人間である。高濱虚子といえば、俳句の発展に重要な影響を与えただけでなく、かつて安養寺を訪れたことがあり、「山門のぺんぺん草や安養寺」(第20頁)という句も残したのである。また、父親は教壇に立ちながら俳句への関心を持ち続けていたため、「生徒たちを集めて、俳句の同好会のようなものを主宰し、俳句に興味を持つ生徒たちを指導し、句会も開いていた」(第83頁)。ちなみに偶然とは言い難いが、村上春樹の父親が句会を催した場所は、「滋賀の石山寺の山内にある、芭蕉がしばらく滞在していたと言われる山中の古い庵」(第84頁)だった。高濱虚子から鈴鹿野風呂へ、鈴鹿野風呂から村上春樹の父へ、村上春樹の父から生徒たちへ、父親の千秋は俳句を受け皿として、日本文化の伝統を継承し、さらに次世代に伝えていった。

家族の伝統と日本文化の伝統を継承した父親であるが、毎朝の「おつとめ」と俳句への情熱は相当個性的だったため、唯一無二の父親像が村上春樹の目に映っただろう。

2.3 断絶から継承へ——村上春樹の変化

村上春樹の父親は家族の伝統も日本文化の伝統も受け継いだ、これはある意味では無意識のうちに行われていたと言えよう。住職の息子として、村上春樹の父親は、仏教の専門学校に入ったが、「それ以外の選択肢はあり得なかったようだ」(第36頁)。そして、彼が俳句に興味を持つようになったのは、まさに西山専門学校

に入ってからのものである。一方、父親とは異なり、村上春樹は当初から親の世代との差異を強調していたようである。

村上春樹は、自分が京都生まれであるにもかかわらず、「物心ついたときには兵庫県西宮市夙川に引っ越していた」（第77頁）ため、「京都生まれ育ちの父とも、大阪で生まれ育ちの母ともまた別の領域に属している」（第78頁）と強調した。「別の領域に属している」ためか、村上は幼い頃から父親と異なった考え方をもっていたようである。例えば、エッセイ冒頭の「猫棄て」の話の最後、村上春樹はこう書いている。

うちにはいつも猫がいた。僕らはそれらの猫たちとうまく、仲良く暮らしていたと思う。そして猫たちはいつも僕の素晴らしい友だちだった。兄弟を持たなかったのも、猫と本が僕のいちばん大事な仲間だった。縁側で（その時代の家にはたいてい縁側がついていた）猫と一緒にひなたぼっこをするのが大好きだった。なのにどうしてその猫を海岸に棄ててに行かなくてはならなかったのだろうか？なぜ僕はそのことに対して異議を唱えなかったのだろうか？（第14頁）

猫は遊び相手だったため、村上春樹は猫棄てに対して心から反対するだろう。なぜそのとき「異議を唱えなかった」かについて今現在でも分からないと書いたが、幼い頃から親の世代と異なった考えを持っていることはこの例から窺わせる。

親の世代との違いは、村上春樹が成長するにつれて、とりわけ学習に対する姿勢に反映されている。学ぶことが大好きだった父親とは違い、村上春樹は「身を入れて勉強しようという気持ちにどうしてもなれなかった」（第60頁）。というのは、「学校の授業はおおむね退屈だったし、その教育システムはあまりに画一的、抑圧的だった」（第60頁）からである。したがって、村上春樹は当時「机にしがみついて与えられた課題をこなし、試験で少しでも良い成績をとることよりは、好きな本をたくさん読み、好きな音楽をたくさん聴き、外に出て運動をし、友だちと麻雀を打ち、あるいはガール・フレンドとデートをして」（第63頁）いた。村上春樹は当時、自分の考えが正しいものだと思い込んでいたが、その態度は明らかに父親を失望させた。結局「父は慢性的な不満を抱くようになり」（第60頁）、村上春樹も「慢性的な痛み（無意識的な怒りを含んだ痛みだ）を感じるようになった」（第60-61頁）。大人になってから、村上父子の関係は一層冷え込み、二人は「二十年以上まったく顔を合わせなかったし、よほどの用件がなければほとんど口もきかない、連絡もとらないという状態が続いた」（第85頁）ようである。

エッセイに描かれた父親との関係について、村上春樹はこう分析している。「人生のある時点で、そういうところからあらためて関係の再編成みたいなことに取り組んだなら、話はまた少し違っていただかもしれない。」（第86頁）しかし、当時の村上春樹にとっては、「そのような新たな接点を手間暇をかけて探し求めるよりは、とにかく当面は自分のやりたいことに力と意識を集中させたかった」（第86頁）。なぜなら、自分が「まだ若かったし、やらなくてはならないことがたくさん控えていたし、自分の目指すべき目標がとても明確に頭にあったからだ。血縁のややこしいしがらみみたいなものより、そちらの方が僕にとっては遥かに重要な案件だった」からである（第86頁）。

村上春樹の分析は、表面的には親子の世代間ギャップや、考え方の違いによるコミュニケーションのズレを強調しているように見える。しかし、「自分の目指すべき目標がとても明確に頭にあった」村上春樹は、父との関係を修復したいというわけではないだろう。彼からすれば父親は唯一無二の存在であり、それゆえに父親がやってきたことは自分には通用しないし、何の意味も持たないに違いない。こういう意味では、村上春樹が言及した父子関係の修復とは、単に仲良くやっていくための問題ではなく、むしろ世代間の関係をどう扱うべきか、言い換えれば継承そのものといった方がいいだろう。実際には村上春樹が自分と父親の関係を分析する部分には、父の世代との断絶を前面に打ち出し、その断絶を固持する姿勢も明らかなのと言えよう。村上春樹が表した断絶と固持は、継承の可能性を徹底的に抹殺し、そのためだったのか彼と父親との関係はすっかり冷えてしまった。だ

が、父親と息子の血縁、世代間の継承は本当に簡単に断ち切られるものなのだろうか。答えはいうまでもなく否定である。

『猫を棄てる』において、村上春樹は自分の「勤勉とは言いがたい生活態度」(第60頁)が父親を落胆させたと書いた。その原因は、「自分が、その人生において果たすことのできなかったことを、一人の息子である僕に託したいという思いが、やはり父の中にはあった」(第84頁)からである。そして村上春樹に「トップ・クラスの結果をとってもらいたかった」(第60頁)かも知れず、「時代に邪魔をされて歩むことのできなかった人生を、自分に代わって、僕に歩んでもらいたかった」(第60頁)と村上春樹は推測した。村上春樹の父が村上春樹に託した願いは、単なる息子への期待ではなく、自分の世代の慣習を継いでほしいという狙いだったのである。そして、その継承の思いは、彼が村上春樹に語った中国人捕虜の斬首体験に顕著に反映されていると言えよう。一方、父親に負けず劣らず頑固な村上春樹は、長い間意識的にも無意識的にも父親の期待を拒んでいたが、父親がなくなる少し前に、ようやく「考え方や、世界の見方は違っても、僕らのあいだを繋ぐ緑のようなものが、ひとつの力を持って僕の中で作用してきた」(第88頁)と気づいた。

村上春樹の気づきは、継承の肯定であると同時に、それまで自分が抱いていた親世代との断絶への反省とも言えよう。そして、このような気づきは、当然前述した彼なりの歴史に対する理解とその生成と深くかかわっている。父親との冷え込みから病室での和解まで、親子関係を描いた村上春樹は親世代との断絶から継承への変化を表現した。勿論変化には、継承が多大な役割を果たしており、これも歴史の意義を表していると言えよう。

以上『猫を棄てる』の主な内容を分析したが、このエッセイは決して単純な客観的な記述ではないことがわかる。村上家の家族史は独特なもので、すべての家族がそのような経験を有するわけではないが、その家族史は継承によって形成されたものに違いない。つまり、継承がなければ村上家の具体的な家族史もないということである。

3 個人史と集団史の置き換え

村上家の家族史は唯一無二のものであるが、継承によって形成されたことは前節で論じた。だが、一家族の歴史はあくまでも個人的な歴史に過ぎず、唯一無二の個人史、家族史は、いかに集団史と結びつき、置き換え関係になったのだろうか。この問いに答えるには、村上春樹が繰り返して強調した猫の象徴的な意味と役割を分析する必要があると思われる。

3.1 過去の日本の代表—昭和30年代の「猫棄て」

本稿の「はじめに」に触れたように、村上春樹はこのエッセイにおける「猫棄て」の話の重要性に何度も言及した。いわゆる「猫棄て」の話は、エッセイの冒頭に出てきた、幼い村上春樹が父親と一緒に海岸に猫を棄てて行くことを指しているが、信じられないことに、その棄てられた猫は村上父子よりも先に家に帰って来てしまった。この話について、多くの人が村上春樹の父親の表情の変化に注目している。つまり父親は最初に「呆然とした顔」(第13頁)だったが、「やがて感心した表情に変わり、そして最後にはいくらかほっとしたような顔になった」(第13-14頁)のである。村上春樹の父は幼少の頃、「お寺に小僧として出され」(第30頁)だが、それは「そこの養子になる含み」(第30頁)も持っていたため、棄てられるという点から、その猫は村上春樹の父を象徴していると思われる人がいる。⁽⁹⁾ また、同様に棄てられるという観点から、村上春樹の父は棄てられた猫が無事に家に帰って来たのを見て、自分自身と重ねたと分析し、「雌猫、記憶、歴史という三者はおそらく同じものだったかもしれない」⁽¹⁰⁾と指摘する人もいた。

村上春樹は、確かに幼い頃の父親のことを述べた後、棄てられた猫が家に帰った時の父の表情と結びつけ、

棄てられる体験が子供に心の傷を残しただろうと書いた。この点からすれば、棄てられた猫を村上春樹の父親とみなすのは合理的な見解と言っていだろう。しかし、もし棄てられた猫が村上春樹の父親の象徴とすれば、『猫を棄てる』は単に一人の物語に過ぎず、あとがきに書かれたような「僕らの暮らす世界全体を作り上げている大きな物語の一部」（第100頁）ではないはずである。一方、もし棄てられた猫を記憶と歴史の象徴だと見なせば、棄てたくても棄てられないものがあるという点から言えば、棄てられた猫が村上父子より先に帰宅するわけが説明できる。しかし、この解釈では、猫に象徴された記憶や歴史の主体は一体何なのかという問いに取り組む必要がある。また、この解釈は猫の象徴性だけを取り上げ、エッセイにおける猫の役割について触れていない。実際には、この「猫棄て」の話においては、父親の表情の変化より、村上父子の「猫棄て」の時期に注意を払うべきであろう。つまり「僕はまだ小学校の低学年だったと思う。おそらく昭和30年代の初めだったろう」（第11-12頁）における「昭和30年代の初め」こそがこの「猫棄て」話の肝心なところと言えよう。

『猫を棄てる』における他の時間表現と比べて注目すべきところは、「昭和30年代」は唯一精確な時間ではなく「～年代」を使ったところである。いわゆる「昭和30年代」は、西暦の1955年から1965年に相当するものであるが、そこに含まれた意味は時間のことだけにとどまらない。柄谷行人氏は『歴史と反復』において、「昭和～年代」の使い方について論じたことがある。彼の論考では、「昭和～年代」のような「言い方が可能なのは「昭和三十年代」までである。「昭和四十年代」という表現はめったに聞いたことがない」⁽¹¹⁾。また、「昭和30年代」は「1960年代」とほぼ同じ時期を指しているが、両者に対する人々の感覚は大きく異なっている。というのは「後者が国際的な視点において見られているのに対して、前者は、いわば明治以来の日本の文脈を引きずっている」⁽¹²⁾からである。言い換えれば、「昭和30年代」は、日本の近代化の連続性が示されているが、その連続性は「昭和30年代」を一つの節目として断ち切られたのである。それでは断絶の節目としての「昭和30年代」の日本に、一体どのような変化が起きたのだろうか。

「昭和30年代」は1955年から1965年までの10年間を指しているが、日本が敗戦、降伏後、二度目の10年間でもある。それ以前の日本は、アメリカをはじめとする占領軍が推進した民主化運動を経て、敗戦後の経済的、物質的困窮に苦しんだが、やがて朝鮮戦争の勃発が原因で、不況から脱出した。昭和30年代の最初の年である1955年は、日本経済は戦前の水準に回復しただけでなく、政治的にもいわゆる「55年体制」が確立されたのである。したがって、「昭和30年代」に突入する昭和30年は「戦後史の重要な区切りとなった年である」⁽¹³⁾。経済の回復と政治面における「55年体制」の確立に加え、「昭和30年代」には「消費革命」と「都市化」も起こった。「昭和30年代」に起きた変化は、日本の現状及び将来の発展に新しい認識をもたらしたが、その典型的な例は、1956年に発表された『経済白書』における「もはや「戦後」ではない」というキャッチフレーズに対する理解の変化に集中されている。清水一彦氏は「もはや「戦後」ではない」という社会的記憶の構成過程」において、次のようにまとめている。

この表現には当初から複数の解釈があったが、年末までにはメディアと受け手の相互作用で著者の意図とは異なる解釈が選択され社会的記憶となり、その後再構成をくりかえし変容していった。敗戦からの回復をバネにした成長が終ったあとの厳しい経済環境を予測した警句は、現在では、神武景気をへて戦後ではなくなった日本の明るい未来への凱歌として通念化している。⁽¹⁴⁾

「もはや「戦後」ではない」という社会的記憶の変化ぶりは、当時の日本人の日本の現状および将来発展に対する認識を反映していると言えよう。

「昭和30年代」という言葉に対する特別な感覚は、まさにこうした社会情勢とそれに伴う変化がもたらしたものでしょう。「昭和30年代」という言葉が「明治以来の日本の文脈を引きずって」⁽¹⁵⁾いるが、より国際志向の「1960

年代」と重なったのは、近代化の発展は段階的にやり遂げたと認められたからである。したがって、新たな発展期に邁進しようとする節目において、過ぎ去った過去と決別する必要が求められたのである。こういう角度からすれば、『猫を棄てる』における「昭和30年代の初め」という表現は、記憶がほんやりしていたために使われたというより、「猫棄て」の話が特別な時期に起こった出来事であるということを強調しようとするために使われたのだろう。棄てられた猫は一見したところ、村上春樹の父親の象徴のようであるが、実は「昭和30年代の初め」に棄てられた過去の日本のことだったのである。この日本とは、村上春樹の父が経験した「不運としか言いようのない」（第17頁）時代の日本で、具体的に言えば、「大正デモクラシーは既に終わりを告げ、昭和のどんよりと暗い経済不況へ、そしてやがて始まる泥沼の対中戦争、悲劇的な第二次世界大戦へと巻き込まれていく。そして戦後の巨大な混乱と貧困を、懸命に必死に生き延びていかななくてはならなかった」（第17-19頁）日本である。こうした日本は高度成長を目の前に、「もはや「戦後」ではない」という社会的記憶の中で、雌猫のように見棄てられたのである。

3.2 今日の日本の縮図—行方不明の子猫

「猫棄て」の話における雌猫は「不運としか言いようのない」（第17頁）日本を象徴しており、その象徴性は「昭和30年代の初め」という時間的表現によって明らかにされた。雌猫はエッセイの冒頭に出てきた猫であるが、それに対してエッセイの最後に出てきた白い子猫は何を象徴し、その象徴性はいかに表現されたのだろうか。

白い子猫の話も、村上春樹が子供の頃の話である。ある夕方、村上春樹の家に飼われた白い子猫が「松の木を上って」（第92頁）いき、「上の枝の中に姿を消した」（第92頁）。「しかしそのうちに、子猫は助けを求めるような情けない声で鳴き始め」（第92頁）、それを耳にした村上春樹は父親に来てもらった。だが、「父にも手のうちようはなかった」（第93頁）ため、「子猫は助けを求めて必死に鳴き続け、日はだんだん暮れていった」（第93頁）。翌日、子猫の「鳴き声は聞こえなくなって」（第93頁）いて、村上春樹は「猫の名前を何度か呼んでみたが、返事はなかった」（第93頁）。村上春樹は、「夜のうちに下になんとか降りてきて、そのままどこか行ってしまった」（第93頁）と考えたが、どこに行ったのかは想像できなかった。一方、村上春樹は「降りられないまま、松の木の枝で疲弊し、声も出なくなり、時間をかけて衰弱して死んでいた」（第93頁）かもしれない白い子猫の姿を「よく想像したものだ」（第93頁）。

『猫を棄てる』の冒頭と結びとともに猫に関する話が出たため、棄てられた雌猫だけでなく、白い子猫も何かメッセージを伝えているのではないかと見られている。例えば鄒波氏は次のように分析している。「上に登ることは現実と適切な距離を保つ比喩で、これは割と簡単にできることである。それに対して地上に降りるのは歴史と現実
に注意を払うことを意味していて、そう簡単にはできないことと言えよう。」⁽¹⁵⁾ また、田中実氏は、冒頭と結びの2匹の猫を比較し、次のように論じている。

冒頭の猫を棄てる話は、結果的に猫が戻ってきたのですから、どうやって帰って来たのか、その地域を詳細に調べれば、結果の原因を突き止められる可能性にあります。これは「地下一階」までの「客観的現実」の枠組みに収まります。これに対し、末尾の可愛い子猫の「消えた」話は原因と結果の因果関係、そのロジックを解体、無効にさせ、出来事の表層を雲散霧消させているのです。⁽¹⁷⁾

鄒波氏と田中氏はともに子猫を論じたが、その焦点は猫の役割で、象徴性には当てられていない。彼らの分析が妥当かどうかはともかく、もし『猫を棄てる』の冒頭の猫が象徴的な意味を持っていれば、最後の子猫も、それに呼応する関係で何らかの象徴的な意味を持っているはずである。

『猫を棄てる』には子猫に関する描写は多くはないが、よく分析すれば、白い子猫のことは、父親と和解に至

らなかった村上春樹と酷似すると言えよう。まず日本語では「子猫」は「小さい猫、猫の子」という意味だが、俳句を作るとき、春の季語としても使われている。そして興味深いことに、「子猫」を季語にして詠まれた俳句の中に、高濱虚子の「寵愛の子猫の鈴の鳴り通し」という一句がある。安養寺を訪れた高濱虚子が「子猫」の句を残したことを意識して子猫の話を登場させたかどうかは不明だが、俳句の季語である点から、「子猫」に俳句好きの父親の息子という意味を読み取ることもできるだろう。次に、子猫に関する描写には「とてもきれいな毛並みの、可愛い子猫」（第91頁）というところがある。「毛並み」は、「動物の毛の生え具合や色つやの様子」という意味のほか、「血統・家柄・学歴などの質」の意も含まれている。村上春樹が小さい頃、「いろんな猫がうちにやって来ては去って行」（第91頁）き、その子猫がどうして飼われるようになったかについて「記憶はない」（第91頁）ため、子猫が「とてもきれいな毛並み」を有するのは「血統」と無関係と言えよう。一方、「とてもきれいな毛並み」の子猫は、学識における優秀さなど、成功感のイメージが強いのではないだろうか。実際には、村上春樹が作家になって間もない頃、筑紫哲也が編集長として主宰した『朝日ジャーナル』は「若者たちの神々」というコラムで彼にインタビューをしたが、「神々」の登場人物たちはその時点での「成功者」⁽¹⁷⁾ だったことは大塚英志氏によって指摘された。村上春樹が「若者たちの神々」コラムに登場すること自体は、彼が時代の先駆者を意味しており、これは「とてもきれいな毛並み」を持つ白い子猫のイメージと重なっていると見えよう。

以上は子猫という表現およびその外見に焦点を当てたが、木を上っていく子猫の動きに注目すれば、作家としての村上春樹のことも彷彿させる。白い子猫は村上春樹の目の前で「するすると松の木を上っていった」（第92頁）。「するする」は「なめらかに滑るさま、滑るように動くさま」と「事が支障なく行われるさま、順調に進むさま」という二つの意味があるが、二番目の「順調に進むさま」に注目したい。ある意味では「順調に進むさま」を表す「するする」は、村上春樹が自分の目指す目標に向かって勢いよく走り続ける姿も反映していると思われる。村上春樹のデビュー作『風の歌を聴け』は第22回群像新人文文学賞を受賞し、その後野間文芸新人賞、谷崎潤一郎賞、読売文学賞など重要な賞を数多く受賞した。1987年、長編小説『ノルウェイの森』は大ヒットし、日本をはじめ東アジアの国々でも人気を集めた。また、村上春樹は1980年から翻訳を始め、フィッツジェラルドやレーモンド・カーヴァーなど、1990年までに9冊の翻訳書も出版した。村上春樹は、まさにあの子猫のように世間の人々に「自分の勇敢さ、機敏さを」（第92頁）行動で実践してきたと言えよう。

『猫を棄てる』の最後に登場した白い子猫は、イメージから動きまで村上春樹と似ているが、殊に父親との和解を達成する前の村上春樹と酷似していると言える。なぜなら村上春樹が親の世代との断絶を経てようやく父子の血統、「心の繋がり」の断ち切れなさに気づき、病床で父親と和解ができたからである。しかし、このような村上春樹は、既に「父親のことを絶対に人にしゃべらない」⁽¹⁹⁾ 村上とは異なっている。

そう考えれば、村上春樹の変化により、松の木をするすると上っていき「怖くて下に降りられなくなった」（第92頁）子猫は、もはや村上春樹の象徴ではない。それでは、この白い子猫は一体何を象徴しているのだろうか。実は、この答えは既に『猫を棄てる』で示されている。村上春樹は自分と父親の違いについてこう書いている。

おそらく僕らはみんな、それぞれの世代の空気を吸い込み、その固有の重力を背負って生きていくしかないのだろう。そしてその枠組みの傾向の中で成長していくしかないのだろう。良い悪いではなく、それが自然の成りたちなのだ。ちょうど今の若い世代の人々が、親たちの世代の神経をこまめに苛立たせ続けているのと同じように。（第63-64頁）

村上春樹と父親との問題は、あくまでも個人的な一例に過ぎないが、世代間のギャップからすれば、むしろ普遍性のある問題だと言えよう。したがって、子猫が象徴しているのは、村上春樹と同様に親の世代との違いを強調し、継承の重要性を認識していない人々である。彼らは、まさに今日の日本を代表していると言えよう。

3.3 テキストにおける猫の役割

『猫を棄てる』の冒頭と末尾に登場した2匹の猫は、過去の日本と今日の日本を象徴しているため、『猫を棄てる』というエッセイは単に村上家の家族史を描いているだけではないことが明らかになった。そして、2匹の猫が象徴性を帯びたため、村上春樹は個人史と集団史の置換えを実現させたのである。

過去の日本を象徴する冒頭の猫からわかるように、村上春樹の父親は無意識的に家の伝統と日本文化の伝統を受け継ぎ、さらに「血を分けた息子」（第53頁）である村上春樹に戦場での中国人捕虜の処刑体験を語った。だが、「昭和30年代」において、彼は過去の日本と決別し、新たな可能性の道を選んだ。この点から言えば、村上春樹の父親が棄てたのは、実は彼自身であり、彼が経験した「不運としか言いようのない」（第17頁）時代と、そこから生じた記憶と心の傷であった。この心の傷は、異なる経験によって個人差があり、言い換えれば、あの「不運としか言いようのない」（第17頁）時代を経験したすべての人々は、異なった人生経験によって異なった心の傷を持っているかもしれない。だが、異なった心の傷を持ちながら、それと決別したいと思う人は、おそらくその世代に共通する特徴であろう。したがって、「昭和30年代」に村上春樹の父と同様に「猫を棄てた」人は決して少なくないはずであり、その人たちがあの時代を形成させた。これはおそらく『猫を棄てる』に「そんな不運きわまりない世代のささやかな一角を、父は人並みに担う」（第19頁）という表現が出た所以である。したがって、村上春樹の父親にまつわる文章は、猫を棄てた無数の父親の文章であり、過去の日本の文章でもあった。一方、それと同様に、冷え込んだ親子関係は人によってその理由が異なっているが、親世代からの継承を拒否する点では同じであろう。したがって、父親と和解達成前の村上春樹に関する文章は、子猫のような無数の子供たちの文章であり、今日の日本の文章でもあった。2匹の猫の登場によって、一人の人間、一組の父子、一家族の物語は転換され、数えきれない人間、数えきれない父子、数えきれない家族の物語となり、日本という文化共同体の物語になった。この物語が示したのは次の二点にまとめられる。一、継承は拒否できないことで、もし拒否すれば大きな問題が生じるに違いない。二、継承したものはとても棄てきれない。なぜならそれは既に人間の体の一部になっているからである。

村上春樹は2匹の猫の象徴性を用いて、個人史を集団史に置き換えたが、この置き換えの鍵は、まさに彼の歴史に対する理解と、前文で論じた歴史の生成メカニズムにある。実際にはこの置き換えについて、村上春樹はエッセイの最後に「いちばん語りたかった」（第94頁）内容として明らかにしたが、具体的には、本稿「はじめに」に引用した一節、「我々は、広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒の名もなき一滴に過ぎない……」という部分であった。この一節はエッセイの最も重要な部分であるが、田中実氏が指摘したパラドックスは存在しないと思われる。

確かにこの一節における「固有」と「交換可能」の間に矛盾があるように見えるが、『猫を棄てる』に出た「固有」は物事の「特殊性」(particularity)ではなく、「単独性」(singularity)の意味として使われていると指摘したい。「特殊性」と「単独性」の違いについて、柄谷行人はこう論じている。「単独性は、特殊性が一般性からみられる個性性であるのに対して、もはや一般性に所属しようのない個性性である。」⁽²⁰⁾ 雨粒に関する村上春樹の表現を、「特殊性」(particularity)ではなく「単独性」(singularity)で理解すれば、村上春樹と父親との間に起きたことは、他の家族のそれと異なることが明らかで、これは彼らの「単独性」(singularity)であり、「固有」の雨粒で例えられる。しかし、親の世代から子供の世代への継承という点においては、どの家族も同様であるがゆえに、「交換可能」だと言えよう。一家族の継承は個人史で、あらゆる家族の継承を合わせれば集団史になる。これを村上春樹の表現で言えば、「広大な大地に向けて降る膨大な数の雨粒」（第96頁）であるが、これらの雨粒が結局雨になれるのは、継承によって生み出された歴史があるからである。つまり継承こそが、個人史と集団史の置き換えの鍵なのである。一方、もし継承が断ち切られればどうなるのだろうか。答えは明白であるが、つまりあの驚くほど軽快に松の木を上っていき、結局降りてくることができなかった白い子猫の運命に違いない。エッセイの最後に、村上春樹はこう書いている。

僕は今でもときどきその夙川の家の、庭に生えていた高い松の木のことを考える。その枝の上で白骨になりながら、消え損なった記憶のようにまだそこにしっかりとしがみついているかもしれない子猫のことを思う。そして死について考え、遥か下の、目の眩むような地上に向かって垂直に降りていくことのむずかしさについて思いを巡らす。(第97頁)

想像上の子猫の運命で終止符を打ったのは極めて意味深いものである。子猫が、継承を拒否する人々の象徴だったため、子猫の運命への村上春樹の想像は、警告効果を持つ予言とも言えよう。子猫の運命を想像することで、『猫を棄てる』は改めて継承の必要性を強調し、継承こそ今日の日本が子猫のような悲しい運命を避けられる鍵であることを示している。

4 おわりに

『猫を棄てる』は、表面的には父親の体験を詳細に記述したエッセイのようであるが、細かく分析すれば、歴史と歴史の生成に対する村上春樹の考えが表現されたものだとわかる。村上春樹の考えのキーワードは継承で、彼はこのキーワードを中核に、さらに2匹の猫の象徴性と役割を通して、個人史、家族史を、「世界全体を作り上げている大きな物語の一部」(第100頁)、すなわち集団史に置き換えたのである。

ある意味では『猫を棄てる』というエッセイは、村上春樹の歴史に関する語りの革新とも言える。これまでの文学に描かれた歴史を見てみれば、概ね以下のタイプにまとめられる。1) 史料に基づいた歴史小説、つまり過去の時代や人物、それに出来事を題材に作り上げた物語である。2) 歴史を背景に、普遍的意味を持つ典型的な人物や典型的な出来事を表現することを通して、歴史の変化を反映させるものである。3) ヒストリオグラフィック・メタフィクション、つまりリンダ・ハッチオンが言った「自分自身のフィクション性を強く感じつつも、実際の歴史上の出来事を含む」⁽²¹⁾ものである。だが、村上春樹の『猫を棄てる』は以上のものとは異なり、ノンフィクション、つまり村上春樹が川上未映子との対談で言及した「自分に即した実際の事をファクトで語る」⁽²²⁾という方法で完成させたのである。ノンフィクションであるため、村上春樹が書いた個人史と家族史は唯一無二のものとなる。と同時に、置き換えの仕組みも織り込まれたため、この唯一無二の個人史と家族史は集団史の記述へと昇華されていく。勿論、村上春樹の歴史記述が革新的なものである根本的な理由は、何も創作の形式にあるわけではない。歴史と歴史の生成に関する村上春樹の理解があるゆえに、こうした歴史そのものの表現ができたわけである。つまり、『猫を棄てる』で描かれた固有の個人史や家族史は、結局置き換えによって集合史の中に沈潜し、やがて時間の経過とともに消滅していくかもしれないが、エッセイで表現した歴史およびその生成は、継承という普遍的なキーワードによって末長く続いていくのである。

村上春樹の『猫を棄てる』は、これまでの手段や道具としての歴史と峻別した、文学における本当の意味での歴史と言えよう。小説家としての彼は、自分の創作を歴史の領域に伸ばしたことは、作家としての責務を示したのではないだろうか。

注

- (1) 田中実「地下二階」で継承する「一滴の雨水」の責務——村上春樹のエッセイ「猫を棄てる」について」(于“地下二层”継承“一滴雨水”的职责——关于村上春樹的随笔《弃猫》)周飛訊、鄒波校『世界文学』2020年第3号第244頁。
- (2) 康熙「村上春樹：僕は中国を侵略した日本軍の末裔であり、あの残酷な『疑似体験』の継承者である」(村上春樹：我是侵华日军的后代：我是那残忍的“疑似体验”的继承者)『中華読書報』2019年5月15日第4版。
- (3) 黄国山「村上春樹の『猫を棄てる』における戦争観」(村上春樹《弃猫》中的战争观)『名作鑑賞』2021年第7号第21-23頁。
- (4) 谷立立「ある長い“和解”」(一次漫长的“和解”)『檢察風雲』2021年第9号第82頁。
- (5) 前掲注(4)第82頁。

- (6) 前掲注 (4) 第83頁。
- (7) 村上春樹『猫を棄てる——父親について語るとき』文藝春秋2020年第96－97頁。傍点原文。なお本稿は単行本版をテキストとし、以下本文からの引用はページ数だけを記す。
- (8) 村上春樹、川上未映子『みみずくは黄昏に飛び立つ』新潮社2019年第458－459頁。
- (9) 藪田隆一「村上春樹「猫を棄てる－父親について語るとき」：臨床心理学的－考察」『京都光華女子大学京都光華女子大学短期大学部研究紀要』2020年12月第143頁。
- (10) 「村上春樹の『猫を棄てる』、自分への日記のようで」（村上春樹的《弃猫》，更像是写给自己的日记）
<https://www.bjnews.com.cn/detail/161241293415212.html> (2023年9月19日閲覧)
- (11) 柄谷行人『定本 柄谷行人集5歴史と反復』岩波書店2004年第64－65頁。
- (12) 前掲注 (11) 第65頁。
- (13) 市川孝一「昭和30年代はどう語られたか——“昭和30年代ブーム”についての覚書」『マス・コミュニケーション研究』2010年76巻第9頁。
- (14) 清水一彦「“もはや「戦後」ではない”という社会的記憶の構成過程」『江戸川大学紀要』2015年3月第195頁。
- (15) 前掲注 (11) 第65頁。
- (16) 鄭波「村上春樹：再びノーベル文学賞とすれ違ったが³」（虽然村上春树再次与诺奖擦肩而过）『文匯報・文匯学人』第412号2019年11月8日。
- (17) 田中実「無意識に眠る罪悪感を原点にした三つの物語——〈第三項〉論で読む村上春樹の『猫を棄てる 父親について語るとき』と『一人称単数』、あまんきみこの童話『あるひあるとき』——」『都留文科大学大学院紀要』2021年3月第16頁。
- (18) 大塚英志『「おたく」の精神史 一九八〇年代論』講談社2004年第32頁。
- (19) イアン・ブルマ『イアン・ブルマの日本探訪』石井信平訳 TBS ブリタニカ1998年第93頁。
- (20) 柄谷行人『探求II』講談社1989年第10頁。
- (21) 袁洪庚「ポストモダン文学 リンダ・ハッチョン筆記録」（后现代主义文学琳妲·哈琴笔谈录）『現代外国文学』2000年第3号第124頁。
- (22) 前掲注 (8) 第443頁。